

研究

潮谷寺古仏の由来 (三)

— 土佐の国司一条家の崩壊 —

会員 岩 田 善 市

一条家系図

教房—房家—房冬—房基—兼定—内政

康政

悲劇の国司一条兼定卿のことを知るには、一応一条家の歴史にふれなければなりません。

土佐国司一条房家は、文明七年(一〇七五)左大臣教房卿の第二子に生まれ、將軍足利義政より土佐の国司に補せられ、土佐国七太夫、長宗我部氏(三千貫)本山氏(五千貫)吉良氏(五千貫)大平氏(四千貫)山田氏(三千貫)安政氏(五千貫)津野氏(五千貫)及び幡多郡三十六人集に迎えられて、幡多郡中村城を修築して一万七千貫を領したのてあります。こうして七人衆の上に立ち、中村は土佐の都として繁栄することになりました。房冬、房基と後を継ぎ、天文十八年兼定その後をついで国司となりました。そして天文二十年十一月には正五位に叙せられ、ついで左近衛少将、従三位中将、権中納言と、とんとん拍子に昇進しまいが、特は位よりも実力がものを云う戦国時代です。兼定卿の生まれは天文十三年(一五四三)には既に細川氏綱と細川晴元とが和泉堺に戦い、越後では諸将が長尾晴景に叛き、諸国の大名互に崛起し侵略争奪をこととした時代です。この下剋上の時代を生もうけたと云う事は、兼定卿にとっては何れも宿命でありました。

この母相は土佐の国でも同様で、一条氏の配下七太夫

の内長宗我部氏は、両豊を拠点として高知平野の中心地城を占めて成長し、新興勢力の第一人者となつて、河内諸国を威圧し始めました。戦国の世では宗持盛衰は世の常で、永正六年(一五〇九)には長宗我部兼房(元親の弟)が本山、山田、吉良、大平等々豪族から怨嗟を受けて攻撃され、両豊城は落城、兼房は敗死しました。その時僅かに六歳の一子國親は城から脱出、中村の一条房家卿(兼定の曾祖父)の庇護の下に成長し、房家卿のとりなして永正十五年(一五〇八)本領河内豊城に帰ることになりました。そして天文八年(一五三九)長宗我部國親は長子として元親が生誕しました。これが一条兼定の生誕前僅かに四年の事であり、この時國親は宿敵である周辺諸城主を順次攻略して行き、元親の時代には土佐の中央部以東を完全に掌握し、水緑の末には西に一条兼定卿、高岡、幡多二郡を占ますことになりました。

一条家は何と言つても土佐の国司、その上元親の父國親にとつては一条房家は育ての親、滅亡すべき長宗我部家を再生させた恩人であり、元親は兼房の上から他の國人のように力づくで攻めとることはできません。やはり謀略によつて油断なく時をかき、いつの間にか征服するよりほかに方法はありませんでした。

このように長宗我部氏隆盛の半面、幡多の一条氏は逆に相つぐ不幸に見舞われていきました。

房家卿薨去のあとを継いだ房冬卿は、二年の後に四十才の若さで世を去りました。更に長宗我部國親は軍を起して、備前血祭りに先ず一条家の支城大津城を攻め奪つてしまひました。何たることでしょう。六才の時から十か年間も養育され庇護をうけて、長宗我部家の再興を實現してもらつた國親が、大恩ある一条家に対しては

あります。戦口は恩も義理もない、尤も勝つだけだ、これが戦国武士のならいであったのでしよう。

この頃一条家は、兼定卿の父房基卿の時代でありましたが、どうしたことか、突然自害されたのであります。大津城をとられて一か年おまり後の、天文十八年四月十二日夜のこと、二十八才の若盛りでありました。一子兼定卿はまだ六才の幼児でありました。房家卿が中村に居を構え御所を築いて六十年の繁栄した治政から、僅か十年の間に斜陽の道を左どる、今は六歳の幼君を、氣く、一条御所衰亡すとは土佐国人の認めるところとなりました。

ここに叔父康政卿は傍觀出来ず、沙門の人でありました。還俗して、幼君を助け御所の危機を乗切ろうと執政となりて努力しました。ところが兼定卿は何か知らず康政卿を恐れ嫌って、父の死もこの方が原因があるのではないか、いや一条家の危機もこの方が原因ではあるまいかと疑心を抱く様になりしました。康政卿は人を威圧するような深さがあり、才幹の逞しさを持ち政治的手腕も寸ぐれな人でありました。一面くらすをも併せもつ人柄でありました。

この様々二人の様子を見て家老土居宗珊（そん）は心をいためた。二人の間を和ませようと努めました。土居宗珊は兼定卿の幼時より育ての親とも云われた者で、兼定卿は「おい」と呼んでなついていた人でありました。宗珊は國中の人ぞ知る、その智謀と識見の深さ、高さ、人柄の重厚さ、主君思いの忠誠心、家中第一の人として仰がれていました。兼定卿は十五歳を迎え元服しました。康政卿は依然執政でありました。二人の相剋の原因ともなつてしましました。兼定卿は神懸陰で癩癖の強、少年であつたようにです。大友興盛記に、

「康政公（兼定公のまぢかい）御行儀別ならず、動もすればは狂乱の心御座す。」

とありますように、兼定卿の人となりも尚一層二人の間に溝を深めて行き、家中の人々は何時の間にか二派に分けられて行つたのも是非無いことでありました。

たまに長宗我部元親と安芸国虎との間に戦争が起りました。国虎の夫人は兼定卿の妹でありましたので一度は援兵したこともありましたが、二度目の戦いの時でありました。安芸城援兵について血気盛んな二十才の兼定卿は出たと云い、宗珊は自重すべきだと云い、二人は激しく争いました。康政卿と宗珊を中心とする一条家中は、「一条家は強大な武力を持つ左大臣の一家である。御所の安泰を保つためには、長宗我部元親に頼らるべき、つかけをおたえない事以外に方法は無い」とかたい覚悟をきめていたものでした。従つて二度目の援兵は中止することを強行してしまいました。元親一領具足の兵の前にはどうする事も出来ず、安芸氏は滅亡して夫人の娘は一条御所に送り返されて来ましたので、兼定卿は不平不満やるかたなく、無視されたという怒りにもえくるう有様でした。

一条家の内訌をよそに勢力の流動は、土佐郡、高岡郡の諸城は激おずして長宗我部氏の勢力下に組入れられてしまつて、今は幡多郡だけをようやく保つ状態に追詰められてしましました。

「元龜三年壬申（一五七三）藤州宇和郡の領主、西遠寺公広千代を催し、土佐國幡多郡へ登向の聞えあり。其の頃、一条権中兼言康政公へ兼定、強しは太友宗麟公と御縁の續きあり。是に依て重後の長宗中評定有て、土佐の國へ御加勢差渡さる。」

（大友興盛記）
かくて佐伯紀伊守惟敏、鶴原藤部入道宗純、御船奉行深

柄大蔵、若林越後入道道開、四人を連發の發令があり、佐伯、佐賀、佐志生、一尺屋等にて船前へし、元龜三年壬申卯月上旬四國へ押渡りました。宇和島の有力者法華津氏と共に西遠寺氏に圧力をかけたために、一戦も交えずして西遠寺氏は退却しました。

大友の援軍によつて一条氏は危機感をかかせることが出来ましたが、宗麟まさすかに長宗我部氏との討伐は躊躇切れませんでした。長宗我部氏の謀略の手はせまつて来る、一条家の崩れ行く様と目前にして左えられなかつたのであろう。

兼定卿の日常は終に狂乱に及び、手つけようもなくなり、康政卿始め家老重役の人々は心痛この上なく、兼定卿御隠居の内幕も隠密の間に進められる有様で、特にこれを心配し残念に思つたのが家老宗珊でありました。

幼時から手しかにかけ、「ぢい、ぢい」としなわれて来たものに、今一度と諫言申し上げたものが仇となり、かつとなつた兼定卿は宗珊を御手討にしてしまいました。一条家の崩れは失われまゝした。要はすれだ一条家は人心はらへになつて行く、それをまとめる役は康政卿で、重臣會議が開かれまゝ左が、暗にそれと交配して左の長宗我部元親の謀略の手でありました。

時は天正元年(一五七三)九月、評定は決定されまゝした。

「御所(兼定)に日此度、御家督を御子内政卿に御譲りあり、出家道世遊ばさる。内政卿御年少につき康政卿執政と行われらるること従前か如し。宇田御所は互に打毀つべし。」

と。一条家の運命に決定的打撃をおたえする結果となりました。

長宗我部元親には一つの危機がありました。兼定が出

元親は後頼の憂なく他國への攻略は出来ないう事情にありました。伊豫、讃岐の大小名は元親の野望を公たすら警戒していますし、宇和島の法華津播磨守、津島城の津島氏、御莊城の御莊越前守はじめ、黒瀬城の西園寺氏、大洲城主等、何時一条家に連盟して狙うかともわかりません。

一方一条兼定卿は、内外の險惡を切り抜けるため一応豊後に大友氏とたより再興の旗揚げするのよ一策と考え左に相違ありません。そこで、

「家はならぬに長宗我部宮内少輔元親才覚をまつて天正二年甲戌に豊後へ渡海させ奉る。」(大友典察記)

と云ふことになつたのであります。

研究

富尾神社縁起(二)

— 祭礼縁起と杖踊について —

会真 深 天 勘 藏

一、富尾社祭礼縁起

御當社御本山定光寺富尾大権現の由来を尋るに、祖母歿大明神二十一代の後胤佐伯薩摩守惟治公を崇め奉る所神詞なり。蓋祖母歿大明神日鵜鷺草葺不合尊の御母豊玉姫なり。豊后と日向との境に鎮座まします神威今に儼然たり。右先祖惟基より二十一代の惟治公の時分日人五百六代後奈良院大永七丁亥の十一月廿一日佐